

アメリカザリガニ

祭の夜店の金魚屋に、今年はずっとした異変が起きている。一時期、変なベツトブームで幅をきかせていた南米産ミドリガメが姿を消して、代わりにアメリカザリガニが登場したのである。

来春から小学校に新設される「生活科」の目標に「自分と身近な動物や植物などの自然とのかかわりに関心をもち……」という項目があり、新しい教科書にはザリガニが代表的な教材として取り上げられているのだが、そのことを見越した業者のたくましい商魂の現れとみた。

アメリカザリガニはその名の通り日本原産ではない。ものの本には「淡水に住む

エビの一種で、アメリカカのロッキー山脈の東にのみ分布していた種類であるが、一九三〇年に、ニューオーリンズから鎌倉市岩瀬に輸入され、それが現在では土着して関東一帯に広がり、その数も増えてイネの苗などを害するようになった……水田の害敵でその駆除に苦心している」(平凡社『世界大百科事典』)とある。

「法的拘束力」をもつとされる学習指導要領のもと、日本全国の小学校でザリガニが飼育されることになるのだろうか。逃げ出したザリガニが水田で繁殖したら……「生活科」は、米作県新潟にとんでもない代物を持ちこむことになりそうだ。

ちなみに、夜店のアメリカザリガニは一尾八〇〇円也であった。(か)

例を取り上げて、その経緯を伝え、そのことの意味を解説する情報記事もまた必要であった。

③では、連載した一連の「東京通信『根津界隈』」(八木三男)風のエッセー、「小さな庭のバードウオッチング」(加藤誠二四号)、「インタビュ『版画にかける人生』」(小林春規二七号)、「遙かなる天山」(大室茂二七号)のような作品の発掘に、編集者はいっそう心掛けなければならぬまい。詩や短歌あるいは漫画もあってよい。すぐれたコラムも必要である。

④は、これまでも「ひろば」欄を設けてきたが、このページの工夫もだいじである。

冒頭で述べたように『教育情報』の性格にかかわる制約がある。限られた紙数で、当面は「研究誌」と「情報誌」の両側面を満足させなければならぬ難しさがある。しかし、研究所の「新しい段階」への展望は、「財政方針」(研究所通信No三二)が提起したように、千人会員への展望でもある。千人会員を結ぶ「機関誌」としての機能を『教育情報』は兼ねそなえなければならぬ。そのための誌面刷新にいっそうの努力を傾注したい。(九一・四)

(かたおかひろし)『にいがたの教育情報』編集長)